

臨床工学技士に

薦める

今月の 冊

「思う」ことで変えられる

—「60歳まで必ず生きる」腎臓病エンジニアがゆく—
古蘭 勉[著]

著者の古蘭さんは、臨床工学技士でありながら研究者としての道を歩み、現在は近畿大学生理工学部の教授として、臨床工学技士の養成、医用生体材料の研究にご活躍中の方である。一方、若いときから腎臓病を患い、28年間、透析（血液透析→腹膜透析→在宅血液透析）療法を受けた後、腎移植の機会に恵まれ、現在お元気にされている方でもある。その間、鹿児島大学農学部学生→透析テクニシャン→臨床工学技士→鹿児島大学工学部大学院にて工学博士→米国ワシントン大学留学・帰国後、いくつかの国立研究機関を経て、現職に就かれた異色の経歴をもたれる方でもある。

本書は、著者の波瀾万丈のこれまでの半生をまとめたものであり、これから臨床工学技士を目指す方、すでに臨床工学技士として活躍している方にとって、自分の将来を見つめ直すよいきっかけを作ってくれる書と思われる。

古蘭さんは、筆者の古くからの友人でもある。1984年に透析テクニシンの研修として東京女子医科大学に来られたのが最初の出会であった。6歳年長の筆者は、大学院理工学研究科を修了して工学博士を取得し、前年の1983年に東京女子医科大学腎臓病総合医療センターに医工学研究者としてすでに従事していた。本誌の編集主幹も務められた太田和夫先生、阿岸鉄三先生を筆頭に、当時のセンターは全職員が同じ方向を向き、活気に満ちていたところである。振り返ってみればわずか3カ月の研修であったが、腎臓病を患っていることとは露知らず、彼とは酒を酌み交わし、将来の臨床工学、医工連携について意気投合したのを覚えている。

その後、古蘭さんは節目ごとに筆者に手紙を

送ってこられ、そのつど返信したことを記憶している。本書にその一部が掲載されている。年長者とはいえ、偉そうなことを書いてしまったと気恥ずかしい気がするが、それを大事に保管してくれていた同氏の気持ちを考えると万感の思いがする。

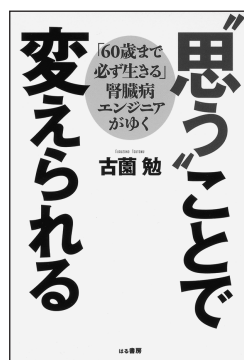
一言で言えば、腎臓病というハンディをバネにされた半生である。おそらく、慢性腎不全でそう長くは生きられないだろうとの思いが、一般人の何倍ものスピードで目標達成を可能としたのであろう。工学博士を取得する大学院時代を例にとると、透析技士として病院で就労しながら家族を養い、自らは透析を受けつつ、残った時間で博士取得のための研究活動続け、また同時に臨床工学技士国家資格取得のための勉強もこなしている。尋常ではない。そこには、本書のタイトルにあるように「思う」ことが重要なことを説いている。「思い」がなければ何も進まないし、何も得ることはないのである。

本書は単なるサクセスストーリーにとどまらない。臨床工学技士の国家資格を取得して、一通りの業務をこなせるようになったが、最近いまひとつモチベーションが上がらない読者がおられるとすれば、大変参考になる書だと思う。

結論からいうと、古蘭さんも筆者も、臨床工学技士の身近なところにながら研究活動続けてきた者であり、臨床工学技士とは本質的に異なるかもしれない。しかしながら、現場で働く臨床工学技士である読者のみなさんだからこそ、日々の業務から見出せる新しいことがあると思う。患者にとって、より有益な治療技術の創出は臨床工学技士だからこそできる業である。

本書が読者の「思い」につながるとすれば、古蘭さんにとって大きな喜びにつながるのではないかと思います。ここに紹介した。

（東京女子医科大学臨床工学科 峰島三千男）



はる書房
192ページ
2017年7月発行
定価：本体1300円（税別）